

めた飛龍は一転して亢龍となります。

「亢龍在悔」（亢龍悔いあり）

志ではなく欲望に身を任せ、人の意見も聞かずにひとり天高く昇っていった飛龍には、もはやいつも付き従っていた雲もついていきません。雲を呼び、雨を降らせる能力があるから龍なので、雲を呼ばなくなったら、亢龍となつて凋落していくしかありません。

しかし例えてみれば、青信号が突然赤信号に変わることがありません。必ず点滅したり黄色信号になったりして危険を知らせているはずですが、にも拘らず、その兆しに気づかなかつたふりをして、「これくらいなら大丈夫だろう」と改善を惜しんだからこそ、亢龍になつてしまったのです。

一度亢龍になつた龍は、もう二度と空へは飛び立てないのでしょか。「亢龍悔いあり」といっていますが、亢龍になつて初めて、「いままで俺は間違つていた……」と本当に悔い改めたとしたら……。

ここで吉凶の話の思い出してください。悔は吉に存じます。一度地に落ちた亢龍も、とことん悔い改めることで、もう一度新しい別の吉へ、ゆつくりと

転換していくのです。

悠然と 節を樂しむ

人間が志を達成していく様を、龍が成長していく六つの過程に準えて描いた「乾為天」。トントンとその節目を越えていく人もあるし、長く一か所に止まる人もある。あるいは潜龍からいきなり飛龍へと上り詰める人もいます。その好例がライプドアのホリエモン氏です。彼には志がなかつた。本当はその力が備わつていないのに何かの拍子で飛龍になると、これまた猛スピードで地に落ちていきます。

順境で勢いがあつても、逆境で思うように進まなくても、ゆめゆめ焦つて早成を望まないこと。人生には進むべき時に進み、止まるべき時は止まるしかないのです。

「易経」の卦の中でこの止まるべき時をどう過ごしたらよいかにも触れています。

「易経」には節を越えたほうがいいのか、越えられないのはよくない、という考えはありません。節は例えるなら四季の中の冬であり、一日の中の夜。その時をどう過ごすかです。冬に春を望んで種をまいても、芽は出ません。夜中に朝やるべき仕事をやったら、せ

つかく太陽が出た朝にはぐつたりして本来の活動ができなくなるのです。冬は次の春を迎える準備をする時であり、夜は次の一日を迎える準備をする時。人生における節の時もまた、次に進むべき時のためにしっかりと力を蓄える時期なのです。

そしてこの節の時が人間を強くします。竹がしなつて簡単に折れないのは、所々に節があるからです。「しなう」という言葉には「従う」という意味もあり、人間も「つらい時」に従うから節ができて、強くなるのです。例えば本来の実力を認められず、自分より実力のない人や年下の者に従わなければならない時期、それは人に従っているのではなく、その「時」に従っているのだと、「随」の卦に書かれています。

「節」の卦に「安節。亨」「甘節。吉」「苦節貞凶」とあります。節の真つ最中であつて、「いまは進むべき時ではない。しかしこの節の時が自分を強くしてくれる」と心安らかに、そして悠然と樂しめる境地にあれば、時が来れば必ず亨る。しかし節をつらく苦しいと感じたら亨れない。また節は程のよさも意味し、亨れる時なのに原則にこだわつて、進まないのも凶です。

節とは一時的な停滞期ですが、そん

な節どころの騒ぎじゃない、苦しみの上に苦しみを重ねた艱難辛苦の時があります。「易経」の「坎為水」（習坎）の卦では、生きていく希望を失い、何をやる気力もないような状態について触れています。そういう時は「水に習つて前へ進め」と教えています。水はどんな険しい山あひも、止まらずに石や岩の形に従つて流れていきます。そんな水の性質に習つて、朝起きて、ご飯を食べ、排泄をするという、最低限のことでいいから、できることをやっ

ていく。そうすればだんだん力がついてきて、いつか亨り、その後人々から尚ばれる、とあります。「易は窮まれば変じ、変ずれば通じ、通ずれば久し」

「易経」の有名な言葉ですが、習坎のような、人生に一度あるかないかの困難も、時が過ぎれば変化し、亨る日が必ず来るのです。その逆もまた然りで、決して亨り続けることもなく、人生の折々で必ず節は訪れます。

いま自分の置かれた時を知り、その通塞を知ることが大切です。亨る時は「治」ありて乱を忘れず、の気持ちは持ちながら果敢に進み、節にありては止まりてそれを悠然と樂しむ。それが「易経」の教えなのです。